



番組についてスタッフと打ち合わせをするモビナさん(中央)、家庭内暴力や人権、選挙参加に関する啓発番組を制作することもある

FIELD SKETCH

国づくりを支える女性の経済活動

長期にわたる紛争とタリバン政権下で、社会的、経済的に厳しい状況に置かれてきたアフガニスタンの女性たち。教育や就業の機会に恵まれず、生活に困窮する女性が自立できるよう、JICAは女性の経済活動を促進する支援を行っている。



アフガニスタン
Afghanistan

地方女性の経済活動を支援

バルフ州の州都マザリシャリフは、アフガニスタン北部の拠点都市だ。23年に及ぶ紛争が終結して約5年、新しい道路や建物の建設が進む市内は活気に満ちている。路地裏では、水くみの途中なのか、共同井戸で気持ちよさをそうに水浴びに興じる子どもたちの姿が見える。

2004年から道路や学校の改修など同市の緊急復興支援を行ってきたJICAは、現在、バルフ州の開発に向けてさまざまな分野で事業を展開している。その一つが「女性の経済的エンパワーメント支援プロジ

エクト」だ。

長期にわたる紛争で多くの人材を失ったアフガニスタンでは、女性も国づくりに寄与する経済活動を担う重要な人的資源であるにもかかわらず、文化的に外出を制限される、教育へのアクセスにも恵まれなかったため、経済活動に参加することが難しい。特に、紛争で夫を失ったり障害を負った家族を抱える女性は、現金収入源がなく貧困から抜け出すことができない状況に置かれている。

このプロジェクトは、バルフ州、カンダハル州、パルミヤン州の地方女性の経済活動を支援することで生活向上を促進すると

同時に、プロジェクトで得た教訓や知見を地方(州女性局)から中央(女性課題省¹)にフィードバックし、女性課題省において女性の社会的地位向上のための政策提言能力を強化することが目的だ。05年2月に開始され、カブールをベースに、JICAの長期専門家4人が女性課題省と3州の女性局と協力しながら活動している。

具体的には、各地域のNGOやFCDC(Female Community Development Council)²がプロジェクトの支援のもと、女性の経済活動の促進につながるパイロット事業を企画立案し、州女性局とともに事業を実施する。バルフ州では谷真紀子専門家とJICA現



JICAの支援でRRB内に設置された女性のための「経済情報センター」。基礎的な経済知識や経済活動に関する情報、資料が集められ、自由に閲覧できる



地スタッフのバリライさん、ホサイさんがプロジェクトの運営に当たっている。

「昨年、事業を公募したところ、20団体から応募がありました。そのほとんどがカーペット織りや縫製、刺繍に関連したものでした。おそらく、女性の職業とはそういうものだという概念が定着し、ほかの選択肢を知らない、あるいは情報を得る機会が

ないために、経済活動に参加するという意識が低いのだと思います。また、たとえ製品を作っても実際に売れなければ収入にはなりません。そこでバルフ州では、女性の経済活動への参加意識を高めるもの、マーケティングが重視されているもの、そして、イスラム国では女性の組織化が難しいので、組織化と組織強化を促進するもの、の3つ

の方針のもとに事業を行いたいと考えています」(谷さん)

実施するパイロット事業は年間3件程度で、予算が1万6000ドル以内の規模のもの。そうして今年度選ばれた事業が「ラジオ・ラビア・バルヒ(RRB)」による女性の経済的エンパワーメント向上プロジェクト」と「家畜飼育プロジェクト」だ。

アフガニスタン初の女性向けコミュニティラジオ局RRBの女性アナウンサー。現在、18人のスタッフと、6人のボランティアがいる。大学でジャーナリズムを学んだ者も多い

ビルの5階にある放送局は小さなスタジオを2つ備えている。カナダのNGOから放送機材やスタッフの技術研修の支援を受けた

1 政治的・社会的・経済的に困難な状況に置かれてきた女性の権利を回復し、地位向上を図るために政策提言・計画立案を行う政策官庁。
2 女性のコミュニティ開発委員会(CDC)。政府は住民自身が復興や地方開発の事業を発案、計画、管理、監督するのを支援する「国家連帯プログラム(NSP)」を立ち上げ、国連人間居住計画などの協力機関とともに、各村で民主的な選挙によりCDCやFCDCを組織し、コミュニティの連帯づくりを促進している。

ラジオで経済知識を提供

市内中心部、5階建てのビルの最上階にR
RBの放送局がある。2003年3月にカナ
ダのNGOの支援で設立されたRRBはコミ
ュニティーベースのラジオ局で、女性向けの
番組を提供している。代表のモビナ・ハイラ
ンデシユさんをはじめ、スタッフも若い女性
が中心だ。局の名前は、9世紀にバルフ地域
で生まれた著名な女性詩人ラビア・バルヒに
ちなんでいる。

電気がほとんど普及していないアフガニス
タンでは、ラジオが主要なメディアだ。バル
フ大学でジャーナリズムを専攻したモビナさ
んは、家から出ることが限られている農村部
の女性にとって外の社会とつながる唯一の
手段であるラジオの重要性に着目し、ラジオ局
を始めようとグループをつくった。

「3年前、5人のスタッフとシンプルな機材
で1日2時間、4キロ圏内で放送を開始しま
した。現在は1日16時間、エリアは24キロに
拡大し、対象者は24万人以上。スタッフも18
人に増えました」

北部では女性の80%以上が読み書きができ
ないといわれるが、RRBのリスナーはそう
した女性たちだ。女性の権利に対する人々の
意識を高め、社会における女性の地位向上を

目指して、ニュースや教育番組を中心に、音
楽やドラマなどのエンターテインメントも交
えて、ダリ語、パシュトゥーン語、ウズベク
語で放送している。

ラジオ局に対する地域住民の支持、知名度
が高まる中、RRBは、ラジオを通して経済
的な基礎知識を普及し、女性の経済活動への
参加を促進したいと考え、JICAに事業を
提案。昨年8月に事業が始まり、家計や貯蓄、
収入向上、マイクロファイナンスと起業など
のテーマで構成された全10回の「女性の経済
開発セミナー」を実施した。また、実際に経
済活動に挑戦した女性の成功談を放送したほ
か、これらを編集したものを他地域の3つの
ラジオ局にも配布した。

当初、女性課題省や州女性局は「女性はラ
ジオを聴く時間がない」としてこの事業に懐
疑的だったが、モニタリングを通して、多く
の女性が事業の継続を望んでいることや日常
的にラジオを聴く女性が増えたことが分かり、

こうしたメディアを利
用した啓発活動の効果
と重要性を理解するよ
うになったという。

成果を実感したRR
Bは、内容を発展させ
て事業の継続をJICA
Aに提案し、今年5月
からテーマを改善して
セミナーを実施してい
る。また、同国の女
性のための経済新聞
「女性と経済」を6月
に発行。さらに今年は
全州の82ラジオ局に編
集した番組を配布する
予定だ。

「経済活動に参加し
て収入を得られるよう
になり、さらにそれを運用して小規模事業を
立ち上げる女性も出てきています。そ
んなサクセスストーリーも伝えなが
ら、女性たちにチャンスをつかむスキ
ルとパワーを提供したい」

そう意気込むモビナさんからRRBの
女性たちの存在こそ、多くの女性に勇
気を与えているに違いない。



今年6月に創刊された女性のための経済新聞「女性と経済」の草案を谷さんに見せるモビナさん。「今後はサービスエリアを拡大したいし、男性のリスナーも増やしたい」と言う

村の女性を変えた 「家畜飼育プロジェクト」

もう一つの「家畜飼育プロジェクト」はウ
ズベックア村とスルタンババアリシル村の
2村で実施されている。このプロジェクトは、
村の女性が市場で約60ドルで売られている子
羊を買い、飼育して成長した羊を約100ド
ルで売って、40ドルの収入を得ると同時に新
たに子羊を購入し、資産を増やしていくとい
うもの。実施するのは村のFCDCで、事業
費(06年度)は約1万8000ドル。JICA
Aは直接FCDCと契約している。

実は、ウズベックア村は昨年も同様のプロ
ジェクトを実施したが、計画通りの利益をあ
げることができなかった。提案書の承認に時
間がかかってプロジェクトの開始が遅れたた
め、羊の価格が最も高い時期に購入せざるを
得なかったからだ。

だが、バリアライさんは、その経験は決し
て無駄ではないと強調する。

「プロジェクトによって、経済指標では測れ
ないたくさん成果が出ています。アフガニ
スタンでは、家庭内の家畜飼育は女性が、市
場での家畜の売買は男性が行いますが、プロ
ジェクトでFCDCの女性が市場に行き羊を
売買しました。これはこの国では初めてのこ
とで、女性に自信を与えたと思います。また、

経済活動に参加することで家計に貢献できる
という意識が女性たちに変化をもたらし、家
庭内や村の中で男性とさまざまなことを話せ
るようになったり、意思決定の過程に参加で
きるようになっていきます。読み書きができる
ようになりたいという女性が増え、識字教室
も開かれるようになりました」

谷さんによると、最も変わったのはFCDC
Cのリーダー、マラライ・ジョンさん(38)
だそうだ。「昨年JICAと契約するとき、自
分の名前を書いたこともなかった彼女は、手
を震わせながら契約書にサインをしていまし
た。今では「何だってサインできるよ」と豪
快に笑います。何も発言できなかったメンバ
ーたちもどんどん発言するようになり、交渉
だってできますよ」。

FCDCの組織力も強まり、昨年は国連機



ウズベックア村FCDCのリーダー、マラライ・ジョンさん(中央)と谷さん(左)、バリアライさん。マラライさんは4人の子どもの母親だ。05年3月、村のモスクでFCDCの選挙が行われ、9人のメンバーが選出された

関のサポートで作成した提案書を、今年はず
年の教訓を踏まえつつ村の女性のニーズをも
とに自分たちで作成し、事業に取り組んでい
る。また、村のさまざまな問題の解決に貢献
したり、住民の希望を受けて、学校建設や女
性の技術研修、マイクロファイナンスなど新
たな事業も計画中だ。女性たちの変化は、村
全体に影響をもたらし、村人の連帯意識が高
まっているという。

「田舎に行くほど
保守的な村が多く、
人々の意識を変えて
いくことは容易では
ありません。でも可
能性はゼロじゃな
い。ウズベックア村
の女性の变化を見て
きた今はそう思えま
す」と谷さんはほほ
笑む。

長く続いた争いは、社会に、人々の心に、
癒し難い傷を残した。回復するには想像以上
の時間を要するかもしれない。だが、紛争の苦
難に耐え、乗り越えてきた人々には、社会を
立て直す強さがある。アフガニスタンで出
会った多くの女性たちのたくましい姿がそう
信じさせてくれる。



ウズベックア村のパリグルさん(60)の羊。「大きくなったら売って牛を買いたい」。マラライさんは「羊を希望する女性が増えているので、プロジェクトを拡大したい」と言う



ウズベックア村FCDCのメンバーたち。以前はFCDCのメンバーが外部の人と会うときは、村のCDCの了承が必要だったが、今は自由に会うことができる。メンバーの女性は「前は識字の重要性が分からなかったけれど、今は分かる。看板や掲示板を読むことができるし、間違えて買い物することもできる」と話す